

執筆 者 紹 介 (掲載順)

桜井大造 (さくらい・だいぞう)

一九五二年北海道生まれ。一九七三年より十年間、テント劇団「曲馬館」で旅興行。解散後、「風の旅団」旗揚げ。一九九二年まで活動。解散後、「野戦の月」結成。一九九九年の台湾公演以後、台湾人とともに台北に「台湾海筆子」を結成。二〇〇六年、北京にて北京人とともに「北京テント小組」結成。今年は四月、八月に台湾各地にて「台湾海筆子」の新作公演を予定。著書に『風の旅団・転戦するパラム 王国と羈族』(社会評論社)、『野の劇場 桜井大造上演台本集』(論創社)。

陳又維 (Chen You-Wei)

一九八〇年台北生まれ。写真家。劇場・舞踏・映画・スチールなどを主な活動の場とする。「台湾海筆子」所属。

曹疏影 (Cao Shu-ying)

一九七九年ハルビン生まれ。現在香港在住。詩人・童話作家・フリーライター。北京大学文学部卒業。著書に童話集『和呼味一起釣魚』(唐山出版社)がある。

永田修平 (ながた・しゅうへい)

一九八四年東京生まれ。二〇〇三年より「野戦の月海筆子」舞台組。日本写真芸術専門学校卒業後、現在多摩美術大学に在学中。

黒川晋治郎 (くろかわ・おとしろう)

一九五一年東京生まれ。日大全共闘、ML同盟を経て、全通、全国金属傘下の労働運動に入る。革命前衛党の財政支援活動に従事。徳田球一に代表される日本共産党の革命的伝統とレーニン・スターリンの社会主義建設を擁護し、毛沢東のプロレタリア文化大革命を弁証法の立場から完全に擁護する。「プロレタリア写真家同盟」の結成を準備中。

小野俊彦 (おの・としひこ)

一九七四年北九州生まれ。九州大学大学院比較社会文化学府単位取得退学。大学院末期には朝鮮戦争期の北九州における港湾労働社会史などの研究を志すも諸事情により研究中座。二〇〇六年に誰でも一人でも不安定でも入れる労働/生存組合「フリーターユニオン福岡」を立ち上げ、現在同執行委員。

深見史 (ふかみ・ふみ)

一九五三年松山生まれ。東京入国管理局届出申請取

次行政書士。北九州市立大学外国語学部中国語学科中退。現在、慶應義塾大学法学部通信課程在学中。著

書『通訳の必要はありません 道後・タイ人女性殺人事件裁判の記録』(創風社出版)、共著『悪魔のお前たちに人権はない!』学校に行けなかった「麻原彰晃の子」たち(社会評論社)ほか。

崔真碩 (ちえ・じんそく)

一九七三年ソウル生まれ。神奈川県在住。翻訳者・役者・文学者。青山学院大学非常勤講師。「野戦の月海筆子」の役者。編訳書に『李箱作品集成』(作品社)、主な出演作に野戦の月海筆子『変幻痴戯城』(二〇〇七年七月東京、九月北京)、主なエッセーに『影の東アジア』(『現代思想』二〇〇七年二月号)等がある。

仲里効 (なかざと・いさお)

一九四七年南大東島生まれ。映像批評。『EDGE』元編集長。著書に『ラウンド・ボーダー』(APO)、『オキナワ、イメージの縁』(未來社)、〇八年沖縄タイムス出版文化賞。共著に『複数の沖縄 デイアスポラから希望へ』(人文書院)、『沖縄問題』とは何か(弦書房)、『沖縄の記憶/日本の歴史』(沖縄/暴力論)(以上、未來社)ほか。映画『夢幻琉球

つるへんりー」共同脚本、二〇〇三年山形国際ドキュメンタリー映画祭「琉球電影列伝」コーディネートネーターなど。

岸孝太（きし・こうた）

写真家。「Photographers' gallery」に参加、運営に携わる。同ギャラリー他にて、写真展、グループ展多数。

宮本泰成（みやもと・やすなり）

一九六八年京都市生まれ。建築家。「Citrus architects」代表。芝浦工業大学工学部非常勤講師。東京藝術大学美術学部建築科卒。住宅・集合住宅・店舗・商業建築をはじめ、アート作品の展示設計や舞台美術ディレクターなど多彩な活動を展開。「ひとりゼネコン」を旨指す。

太田直里（おおた・なおり）

一九七九年京都市生まれ。京都造形芸術大学で染織を学びながら音楽活動をする中で、社会運動に興味をもつ。音楽で芝居に関わり、以降、自ら芝居を創ることを試みる。「あさやけやけて」作・出演（西部講堂）、「夢がさめたら」井上謙と共同作・出演（長居公園）、「夜光客」作・出演（ミック）。

鈴木一誌（すずき・ひとし）

一九五〇年東京生まれ。グラフィックデザイナー。東京造形大学を経て杉浦康平のアシスタントを二年間つとめ、八五年に独立。「装幀」ばかりではなく、書物全体の設計・ブックデザイナーの立場から

ページに関わりたいたいと思っている。二〇〇一年よりデザイン批評誌『SIGMA』を戸田ツトムとともに責任編集。映画や写真の批評も手がける。著書に『画面の誕生』（みすず書房）、「ページと力」手わざ、そしてデジタル・デザイン」重力のデザイン 本から写真へ」（以上、青土社、共著）に『知恵蔵裁判全記録』（太田出版）、「映画の呼吸 澤井信一郎の監督作法」（ワイズ出版）ほか。

赤崎正一（あかざき・しょういち）

一九五一年東京生まれ。グラフィックデザイナー。本誌デザイン担当。神戸芸術工科大学教員。一九七六年、武蔵野美術大学卒業。以後、九六年まで杉浦康平事務所在籍。専門、エディトリアルデザイン。

荒井真一（あらい・しんいち）

一九五九年富山生まれ。一九八二年、美術学校で吉田克朗から銅版画を学ぶがかわら、サエグサユキオ、久住卓也、ホシノマサル、赤木能里子と「赤木電氣」を結成、即興パンクおよびパフォーマンスを始める。八三年「天国注射の昼」における「日比谷野音、赤ペンキぶちまかし事件 川俣軍司に捧ぐ」で、公園管理事務所から永久使用禁止を言い渡される。その後「大昭和発電」（桑原正彦、久住と）、「現場の力」（サエグサと）、「福福物語」（鈴木健雄、谷川まり、サエグサと）に参加。九九年以降、作品「Happy Japan」などでソロ活動。韓国、フィリピン、インドネシア、台湾、中国、香港、ビルマ、カナダ、英国、米国、ドイツ、フィリピン、タイで公

演。東アジアのアーティストを招いて〇六年「大東亜共栄軒、〇八年「小東亜共栄軒08」を企画。ウェブサイト「ARArt.jp」 <http://www.arart.jp>

演。東アジアのアーティストを招いて〇六年「大東亜共栄軒、〇八年「小東亜共栄軒08」を企画。ウェブサイト「ARArt.jp」 <http://www.arart.jp>

花咲政之輔（はなざき・まさのすけ）

埼玉生まれ。音楽団体「太陽肛門工房」主宰。一九九九年にCD「馬と人間」、二〇〇三年にCD「テロリストブッシュと人間」を発表。東京都内にて活発なライブ活動を展開するとともに、「レフト・アローン」「ラザロ」「ともしび」の映画音楽も担当している。早稲田大学におけるサークルスペース撤去反対運動により、早大当局から立ち入り禁止とされる。早大ピラ撤き不当逮捕抗議署名事務局員。

結秀実（すが・ひでみ）

一九四九年新潟生まれ。文芸評論家。本誌編集委員。『日本読書新聞』編集長、日本ジャーナリスト専門学校講師などをへて、近畿大学国際人文科学研究所教員。著書に『帝国』の文学 戦争と「大逆」の間（以文社）、「革命的な、あまりに革命的な」「一九六八年の革命」史論『吉本隆明の時代』（以上、作品社）、「一九六八年」（ちくま新書）、「増補新版 詩的モダニティの舞台」（論創社）、共編著に「ネオリベ化する公共圏 潰滅する大学・市民社会からの自律」（明石書店）など。

長原豊（ながはら・ゆたか）

一九五二年富山生まれ。法政大学経済学部教員。著書に『天皇制国家と農民 合意形成の組織論』（日本経済評論社）、「われら瑕疵ある者たち 反「資

本」論のために』（青土社）。訳書に、スラヴォイ・ジジェク『迫り来る革命 レーニンを繰り返す』（岩波書店）、同『ロベスピエール／毛沢東 革命とテロル』（共訳、河出文庫）、アラン・バディウ『倫理〈悪〉の意識についての試論』（共訳）、同『聖パウロ 普遍主義の基礎』（共訳、以上、河出書房新社）、同『世紀』（共訳、藤原書店）など。

港千尋（みなと・ちひろ）

一九六〇年神奈川県生まれ。写真家・写真評論家。多摩美術大学教授。著書に『群衆論 20世紀ピクチャー・セオリー』（ちくま学芸文庫）、『考える皮膚 触覚文化論』（青土社）、『注視者の日記』（みすず書房）、『記憶 「創造」と「想起」の力』（講談社）、『映像論 〈光の世紀〉から〈記憶の世紀〉へ』（日本放送出版協会）、『洞窟へ 心とイメージのアルケオロジー』（せりか書房）、『影絵の戦い 9・11以降のイメージ空間』（岩波書店）など。作品集に『波

と耳飾り』『明日、広場で ヨーロッパ1989—1994』（以上、新潮社）、『瞬間の山 形態創出と聖性』（インスクリプト）など。

内野儀（うちの・ただし）

一九五七年京都生まれ。日米現代演劇・パフォーマンス研究。東京大学大学院総合文化研究科教授。本誌編集委員。一九九八年からパフォーマンス研究の学術誌 TDR (MIT Press) 編集委員。著書に『メロドラマの逆襲 「私演劇」の80年代』（勁草書房）、『メロドラマからパフォーマンスへ 20世紀アメリカ演劇論』（東京大学出版会）、『Crucible Bodies: Postwar Japanese Performance from Brecht to the New Millennium (Seagull Books)』、『知の劇場、演劇の知』（共著、ペリかん社）など。訳書に、ステイヴン・バーバー『アントナン・アルトー伝 打撃と破碎』（白水社）など。

鴻英良（おおとり・ひでなが）

一九四八年静岡生まれ。演劇批評・ロシア芸術思想。本誌編集委員。ウォーカー・アート・センター・グローバル委員（ミネアポリス）、国際演劇祭ラオコオン芸術監督（ハンブルク）、舞台芸術研究センター副所長（京都）などを歴任。著書に『二十世紀劇場 歴史としての芸術と世界』（朝日新聞社）。共著に『野田秀樹 赤鬼の挑戦』（青土社）、『反響マシーン リチャード・フォアマンの世界』（勁草書房）など。訳書に、アンドレイ・タルコフスキー『映像のポエジア 刻印された時間』（キネマ旬報社）、タデウシュ・カントル『芸術家よ、くたばれ！』（作品社）、『イリヤ・カバコフ自伝 60年代—70年代、非公式の芸術』（みすず書房）など。林美香誇（はやし・みかこ）本誌装画担当。